

第二十五回 漢水かんすいに抛よりて趙雲すく寡すくなきもて衆おおきに勝かつ、龐令明ほうれいめい 櫛ひつぎを擡かついで死戦しせんを決す

— 漢中争奪戦 (二) —

(前回から今回まで)

夏侯淵かこうえんを討たれた曹操は、黄忠を深く恨み、夏侯淵の仇を討つべくみずから大軍を率いて定軍山ていぐんざんへ向かいます。黄忠が、曹操を迎え撃とうと名乗りをあげますが、諸葛亮は趙雲に同行するように言います。

曹操軍の兵糧を奪いに行くことになり、二人はくじを引いて、黄忠がそれを行なうことになります。趙雲と黄忠は、戻る時刻を決めて、それまでに戻らなかつたら趙雲が加勢に向かうことにします。

(本文抄)

その夜、黄忠は兵馬を率いて先頭にたち、ひそかに漢水かんすいを渡り、まっすぐ北山の麓に押し寄せた。東方から太陽が上ると、糧秣りょうまつが山のように積まれているのが見えた。少数の兵士が見張りをしていたが、黄忠の軍勢が攻めて来たのを見ると、いつせいに逃げ出した。

黄忠は騎兵をいっせいに下馬させると、糧秣の上に柴を積ませ、火をつけさせようとしたとき、張郃の軍勢がかけつけ、黄忠軍と大乱戦になった。これを聞いた曹操は、急いで徐晃じよこうに加勢を命じた。徐晃は軍勢を率いてかけつけ、黄忠を真ん中に取り囲んだ。

一方、陣営で待っていた趙雲は、みるみるうちに午の刻うまになったが、黄忠がもどつて来ないので、鎧かぶとを身につけて馬に乗り、三千の軍勢を率いて救援に向かうことにした。

趙雲は鎗をかまえ馬を飛ばして前方へ突き進むと、一人の大將が行く手をさえぎった。文聘ぶんべいの部将慕容烈ぼようれつである。慕容烈は馬を蹴立て刀をふりまわして迎え撃ったが、趙雲のふりあげた鎗の一突きで刺し殺され、その軍勢は逃げ散った。趙雲はただちに包圍網に突入しようとしたが、またも一手の軍勢に行く手をさえぎられた。

先頭に立つのは魏将焦炳しよへい。趙雲が一喝して「蜀軍はどこだ」とたずねると、「一人残らず討ち取った」と焦炳。

趙雲は激怒して馬を飛ばし、またも鎗の一突きで焦炳を刺し殺すと、残った兵士を蹴散らして、まっすぐ山の麓まで攻め寄せた。

見れば、張郃かんせいと徐晃じよこうの軍勢が黄忠をびっしり包圍し、兵士たちも疲れはてている様子だ。趙雲は一声喚声かんせいをあげると、どつと十重とえ二十重はたえの包圍網に突入し、右に左に馳せまわり、ま

るで無人の境を行くようであった。

その鎗がキラキラと上下するさまは、梨の花が舞うようであり、雪がヒラヒラとひるがえるようであった。

張郃と徐晃は震えあがつて、迎え撃つことができない。

趙雲は黄忠を救い出すと、誰一人その行く手を阻もうとする者はいない。曹操は高みからこのようすを見ると、驚いて諸將にたずねた。

「あの大将は誰だ」

「常山の趙子龍です」と、見知っている者が答えた。

「おお、当陽の長坂の英雄は生きておったのか」と曹操は言い、急いで命令を伝えた。

「趙雲がやって来ても、軽々しく立ち向かつてはならないぞ」

趙雲が黄忠を救い出したとき、ある兵士が指さして、「あの東南の方角で包围されているのは、副将の張著に相違ありません」と言った。

そこで趙雲は本陣に帰らず、東南めざして攻め寄せた。

彼の行くところ、「常山趙雲」という四文字の旗印を見ただけで、かつて当陽の長坂における武勇を知る者が口々に言い合ったため、ことごとく逃げ散り、趙雲は張著も救い出し

たのだった。

曹操は、趙雲が黄忠らを救い出したのを見ると、怒りを爆發させ、みずから左右の將兵を率いて趙雲を追った。

趙雲は本陣に帰り着き、部將の張翼ちやうよくが出迎えたところ、後方で土煙りが舞い上がるのが見えたので、張翼は曹操の軍勢が追撃して来たのだと悟り、趙雲に告げて言うには、

「追っ手が近づいています。本陣の門を閉じさせ、櫓やぐらに上って防御いたしましょう」

趙雲は「門は閉じるな。おまえは、私がむかし当陽の長坂で、一本の鎗と一頭の馬をもつて、八十三万の曹操軍を塵芥ちりあくたと駆け散らしたのを知らないのか。今は軍勢もあれば大将もある。何の恐れることがあるものか」と怒鳴りつけた。

かくして陣の前の壕こうに射手を潜伏させ、陣中の旗や鎗をすべて隠して、銅鑼や太鼓も鳴らすなど命じると、趙雲はただ一騎、陣門の前に立った。

さて、張郃と徐晃が軍勢を率いて、趙雲の陣営に押し寄せたときには、すでに日が暮れていた。人中に旗はなく、音一つなく静まりかえって、趙雲がただ一騎、開け放たれた門の前に立ちはだかっているではないか。張郃と徐晃は踏み込むことができず、思い迷っているところに、曹操みずから到着し、兵士たちをせきたてて先へ進ませた。兵士たちは命令一下、

関の声をあげながら、陣営の前に殺到したが、趙雲が微動だにしないのを見て、身をひるがえして逃げはじめた。

すかさず、趙雲が鎗をあげて合図すると、壕のなかから弓と弩がいつせいに発射された。おりしもあたりは暗闇につつまれ、蜀軍がどのくらいの数かわからない。

曹操がまっさきに馬首をめぐらせ逃走にかかったとき、背後から地をどよもす関の声があらがり、太鼓や角笛つのぶえがいつせいに鳴り響いて、蜀の軍勢が追撃して来た。曹操軍の兵士はたがいに踏みしだきながら、押し合いへしあいして漢水かんすいのほとりまで逃げてきたが、川に落ちて死んだ者は数えきれないほどだった。

劉備は諸葛亮とともに漢水までやって来ると、趙雲の部下の兵士にたずねた。

「子龍しりゅうの戦いぶりは、どうだったか」

兵士は、趙雲が黄忠を救出し、漢水で敵を防いだ一部始終いちぶしじゆうを逐一報告ちくいちした。劉備は大いに喜び、山の前後の険しい道を眺めやってから、うれしそうに諸葛亮に言った。

「子龍は満身まんしんこれ肝きもっ玉たまだ」

(解説)

老将黄忠は、「定軍山の戦い」で敵の大將夏侯淵を討ち取ると、その勢いそのまま曹操を迎え撃って出陣しますが敵の重圍じゅうゐに陥おとってしまい、趙雲が、約束の期限に戻らないのを心配して救援に向かいます。

『三国志演義』は趙雲の戦う姿を、「梨の花なが舞うようであり、ヒラヒラと雪がひるがえるようであった」と美しく描き出します。

曹操が趙雲を追撃すると、趙雲は本陣の門を開けはなち、ただ一騎じんぜんで陣前に立ちます。曹操が伏兵ふくへいをうたがって退こうとした瞬間、矢がいつせいに発射され、曹操は多くの犠牲をだして逃走します。この戦いぶりに、劉備は「趙雲は満身これ肝っ玉だ」と感心します。

『三国志演義』は趙雲ちやううんなど多彩な人物の活躍が心に刻まれ、私たちはストーリーもさることながら、登場人物に結びつけて『三国志演義』を語ることが多いように思います。

毎回の講座終了後に、食事をしながら皆さんと話をしますが、自分は曹操のここが、おれは関羽が、いや私は諸葛亮の・・・と、話が尽きません。それは、皆さんが、これらの登場人物に憧憬やロマンを感じているからだと思います。その中でも、趙雲ファンはかなり多いように思います。

趙雲には関羽・張飛のような派手さはありませんが、関羽の剛情、張飛の乱暴といった性格的欠点がなく、節度ある行動、華々しい戦績、しかも優れた人格と、総合点では『三国志演義』きつての人物といえます。

川本喜八郎氏は、「彼には一寸した気のゆるみで作戦が失敗する、といったようなことは絶対に無いのである。諸葛亮孔明が立てた作戦を、最も確実に遂行できたのは趙雲子龍で、孔明は誰よりも彼を信頼していたフシがある」と述べています（『三国志百態』、アニドウ）。諸葛亮は幾度となく趙雲を起用して、劉備の危難を救っています。趙雲のごとき頼りになる存在があつて、諸葛亮も縦横じゅうおうにその智略をめぐらせることができたのです。

今回は前回につづき、老いてなお衰えぬ気概をもつ黄忠、そして、豪胆こうたんかつ節度ある振る舞いで「いぶし銀」のように光る趙雲の名場面です。

黄忠や趙雲の活躍で、曹操軍はしだいに追い詰められていきます。そして、曹操はついに、漢中は「鶏肋けいろく」のようなものだと言って、撤退していきます。「鶏肋」とは鶏の「がら」のことで、スープになるから捨てるにはもったいないが、さりとて食べるには肉がついてなくて食べようがない、漢中とはそんなものだという意味です。こうして曹操は、一旦手にいれた漢中を放棄して引き揚げていきます。

ここに、漢中はついに劉備の手に帰したのです。このとき、建安二十四年（二一九年）、劉備五十八歳、曹操六十五歳。曹操の死の一年前になります。『三国志演義』第一世代の英雄たちも、老年の域に入りました。

ここで舞台は、再びけいしゅう荊州に移ります。

孫権は、荊州に残った関羽に、関羽の娘と孫権の息子との縁談えんだんを持ちかけます。しかし、自尊心の強い関羽は、「虎の娘を犬の息子に嫁がせることはできない」といって、けんもほろろに追い返し、孫権を激怒させます。怒った孫権は、曹操に提携ていけいを申し入れます。曹操はこれを受けて、樊城はんじょうに駐屯そくじんした曹仁に荊州攻撃の準備をさせる一方、呉にも荊州を攻撃するよう申し入れます。

そこで、諸葛亮は、関羽に「五虎大将ごごたいしやう」の辞令をわたし、先手を打って樊城を攻撃するよう命じます。しかしここで、関羽の性格的欠点けいせつてきけつてんが頭をもたげます。

「五虎大将」の中に老将黄忠の名が入っているのを見て、あんな老兵と一緒にするなど怒ります。前にも関羽は、馬超が劉備の傘下に入った時、馬超と腕比べさせよと申し入れて劉備を困らせています。そのとき、諸葛亮は関羽に手紙を書き、「馬超は張飛と肩をならべる剛

勇ですが、美髯公（関羽）には到底およびません」と、彼をおだててなだめています。そんな強すぎる自負心じふしんが、関羽の性格上の欠点でした。

ここでも使者の費詩ひしから、劉備と関羽は一心同体の義兄弟です、官の上下にこだわってはいけません、と説得されて怒りを収めています。

この後、関羽は快進撃をつづけて襄陽じょうようを占領し、曹仁が守った樊城を攻め立てます。

曹操は、于禁うきんと龐徳ほうとくの二人を樊城の救援に向かわせます。于禁は曹操に仕えて三十年、呂布の討伐や官渡の戦いなどで活躍した歴戦の勇将です。

一方の龐徳は、かつて馬騰ばとうとその子馬超ばちょうのもとで剛勇を謳うたわれ、このときは曹操に仕えていました。旧主の馬超と自分の兄龐柔ほうじゅうが劉備に仕えていたため、龐徳の寝返りを警戒する声があります。

（本文抄）

かくして于禁を征南將軍せいなんしやうぐんに任じ、龐徳を征西都先鋒せいせいとせんぽう任じて、大いに七軍（一軍は一万二千五百人）を出動させ、樊城へ向かわせることにした。

ところが、七軍を指揮する二人の将校が、于禁に会いに来た。

言うことには、

「今、將軍には七手の軍勢を率いて、樊城の危機の救援に向かわれ、必勝を期しておられます。しかし、龐徳を先鋒になさるのは考えものではありませんか」

于禁が、わけをたずねると、

「龐徳はもともと馬超の配下であり、やむをえず魏に降伏したのです。今、もとの主人は蜀で『五虎上將』の位についております。ましてや、彼の実兄の龐柔も蜀で官職を得ております。彼を先鋒にするのは火に油をそそぐようなものです。將軍には、どうして魏王（曹操）にお話しになり、別の者と交替させられないのですか」

于禁はこの話を聞くと、曹操に知らせた。

曹操ははたと気づき、さっそく龐徳を庭先に呼びつけ、先鋒の印を返すように命じた。龐徳はびつくりして言った。

「私は大王のために力を尽くそうと願っていましたが、お役目を解任されるとは、なぜでしょうか」

「わしはおまえを疑ってはいない。だが、馬超は蜀におり、おまえの兄の龐柔もまた蜀にいて、二人とも劉備の配下になっている。わしは疑わなくとも、他の者たちがあれこれ言うか

らな」と曹操。

龐徳はこれを聞くと、冠かんむりをはずし額ひたいを地に打ちつけ、顔中血だらけになりながら言った。「私は漢中で大王に投降してこのかた、いつもご厚恩に感謝し、たとえ肝腦かんろうを地にまみれさせても、ご恩返しができないと思っております。大王にはどうして私をお疑いになるのですか。

私はむかし故郷におりましたころ、兄と同居しておりましたが、兄嫁があまりにも愚かであるため、酒に酔った勢いで殺してしまいました。このため兄は私を骨の髄から恨み、誓つて二度と顔を合わせないと申しております、兄弟仲はすでに切れております。もとの主人の馬超は、武勇はありますが無謀むぼうなため、戦いに敗れて蜀に逃げ込んだのです。今や私とは別の主君に仕えているのですから、むかしの恩義などはとくに断絶だんせつしています。私は大王の恩情に感激しており、どうして二心なぞ抱きましようか。どうか大王にはお考え直しく下さいませように」

曹操はそこで龐徳を助け起こし、なだめて言った。

「わしは卿けいが忠義であることを知っている。さっき言ったことは、他の者の口をふさぐためのものだ。思う存分、手柄てがらを立ててくれ。わしは決して疑ったりはしないから、卿もその気

持ちを忘れないでくれ」

龐徳は厚く礼を述べて家に帰ると、職人に木棺もつかんを作らせた。翌日、正堂ひつぎに棺を置き、親しい友人たちを酒宴に招いた。彼らはこれを見ると、みな驚いてたずねた。

「將軍は出陣されるのに、どうしてこんな不吉ふきつなものを作られたのか」

龐徳は杯をあげて、彼らに言った。

「私は魏王のご厚恩を受け、死をもってご恩返しする覚悟だ。これから樊城に行つて、関羽と決戦するが、もしやつを殺すことができなければ、必ずやつに殺されるだろう。たとえやつに殺されなくても、自分で死ぬつもりだ。だから、前もつてこの棺を用意し、おめおめ生き恥をさらす気持ちがないことを示しているのだ」

(解説)

棺を用意して出陣するのは『三国志演義』のフィクションですが、「国恩を受けたからには死をもって報いなければならぬ。今年、私が関羽を殺さなければ関羽が私を殺すだろう」と、寝返りを危ぶむ声がある中、決死の覚悟で出陣するのは事実です（『三国志』龐徳伝）。